



TITLE:

<研究論文>人の不幸を共に悲しむ
情動：「三項関係情動」としてみる
共感

AUTHOR(S):

山本 (西隅), 良子

CITATION:

山本 (西隅), 良子. <研究論文>人の不幸を共に悲しむ情動：「三項関係情動」としてみる共感. 教育方法の探究 2005, 8: 29-37

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190309>

RIGHT:

人の不幸を共に悲しむ情動 ——「三項関係情動」としてみる共感——

山 本（西隅）良 子

1. はじめに

人間関係において、人々が互いのことを理解するためには、コミュニケーションを通じ、互いに関する様々な情報交換が必要となる。相手がどのような人間であるのか、何を欲しどのように感じているのかを認知し、こちら側も相手と共にそれらを共有する場合、そこに「共感」が生まれる。「共感」という現象は、有史以前から、人類が社会をつくりあげ維持していくために、人と人之间的感情的に結びつける「何か」として、人間の間に普遍的に存在していたと予測されている（澤田、1992）。このように人間関係の基礎とも言える「共感」について、これまで実に多くの研究者によって研究が行われてきた。そこでは、共感に関する発生機構や発達、共感を用いた心理療法など多様なことが明らかにされてきている。本論文では、そのような「共感」に関してこれまで明らかにされてきたことをまとめ概観した上で、「自己」「他者」「事象」という3つの項目から形成される情動である「三項関係情動」という独自の視点から共感を捉え、未だ明らかとされてきていない共感の他側面を呈示することを試みたい。

2. 共感の定義

広い意味での共感の概念は、17世紀頃から「同情 (sympathy) (Hume、1739/1978)」「あわれみ (pity) (Hobbes、1651)」「感情移入 (einfühlung) (Wind (1963) によると Vischer が1873年に初めて用いたとされる)」という語で、哲学、倫理学、美学などで取り上げられてきた。Lipps (1903) が心理学的に定式化し発展させたことで、感情移入の概念が心理学に初めて取り入れられる

こととなり、さらに、「empathy (共感)」という語は、Titchener (1909) が「感情移入」を英訳したことから始まった。Lipps と Titchener は、「共感」について、対象・他者への感情移入の機制を重視した。例えば、「自負心」や「威厳」のような他者の内的特性は、観察する側の筋肉運動知覚的な想像作用においてそれを感じ、行為することによって把握される（澤田、1992）というように、他者を把握する際の内的模倣の過程が強調された。

Lipps と Titchener 以降、実験心理学がより行動主義的になるにつれて、共感の概念は心理学の分野においてあまり問題とされなくなっていき、結果的に、共感は人格心理学の領域において検討されていくこととなった。共感の過程を、Freud (1905/1960) は、自我に縁遠い他者における事柄について理解するのに最も重要な役割を果たすものと考えた。また、現代の人格理論の中に共感の概念を確立するのに貢献した Allport (1937) は、他者の人格についての理解は、模倣的な想定から生じるが、それが不十分な場合には、記憶、想像作用、抽象的概念化がその過程を助けるようになると考えた。行動主義的な人格理論家であった Dollard & Miller (1950) は、他者の感情をコピーすること、または他者の感情の信号に反応することとして、共感する側の外的な感情反応の側面を重視した。1950年以降においても、共感の定義については研究者により様々で見解が統一されていない。また、共感が生じる機制についても多様な考えが存在し、未整理のままの状態で今日に至っている。

見解は統一されていないが、現在の心理学にお

いて、共感の定義として大きく2種の考え方があ
る。一つは、共感を他者の考え・視点・感じ方を
認識・理解する認知能力という「他者理解の過程」
として捉える考え方であり、もう一つは、他者の
感情に一致するが、必ずしも同一でない感情の代
理的経験あるいは共有という「他者との感情の共
有の過程」として捉える考え方である。最近の共
感の定義としては、上記のいずれか一方を取り上
げるというよりはむしろ両方の考えを含んだ定義
をする研究者が多く、その定義として、例えば、
共感とは「単なる他者理解という認知過程ではな
く、認知と感情の両方を含む過程であり、他者の
感情の代理的経験あるいは共有を必ず伴うもの」
(澤田、1992)等とされる。

また、共感を取り上げるとき、よく混同される
ものとして「同情」が挙げられる。Buchheimer
(1963)は、共感の過程は一時的な「没入」の段
階を持ち、他者と「ともに (together with)」感
じることであるが、同情は他者に「沿って (along
with)」感じることで必ずしも他者に入り込むも
のではないと、共感と同情に含まれている過程
の違いによって両者を区別した。また、Mark
(1994)は、同情は相手の感じたことを見る側が
感じたり、相手の経験したことでも心が動かされ
たりするといった特徴を含み、受け身の色合いの濃
いものであるが、一方、共感とは、意図的で知的な
努力をすることで他者の「内側に」入っていつ
たり、相手とつながりを持つようとするところから積
極的な試みであるとし、両情動を区別している。
詳述は避けるが、共感と同情はもともと異なった
経緯で現れた情動であり (Mark、1994)、心理
学においては区別して扱われるのが一般的である。

3. 共感の役割・進化論的起源

共感の種類を考えると、大きく2つの方向軸
がある。それは「自他が融合または分化されてい
るか」という軸と、「自己指向か他者指向か」と
いう軸である。自他融合の共感とは、乳児の伝染
的泣きに見られるような、他者に起きていること
と自分に起きていることの区別がつかない状態で、

他者の感情とほぼ同一の感情を経験することであ
り、反対に、自他が分化された状態での共感とは、
他者の「悲しみ」に対して周りに位置する個体が
「あわれみ」や「同情」を経験する場合のように、
認知能力の発達により、自己と他者を区別できた
上で、他者と同一でない変形された感情を経験す
ることである。

また、自己指向の共感とは、他者の苦しみによ
って自分自身が苦しくなり、自己の苦しみを和ら
げることに方向付けられている「個人的苦しみ
(personal distress) の感情」(Batson et al.,
1981)であり、驚きや狼狽、動揺といった自己に
中心化された感情が表出される。反対に、他者指
向の共感とは、他者の苦しみに対して同情的であ
り、何らかの配慮や援助をすることに方向付けら
れている「共感的心配 (empathic concern)」
(Batson et al., 1981)であり、他者指向の共感
が経験される場合は、他者の立場に対してきめ細
やかな配慮が表出される。Staub (1987)は、自
己指向の共感を平行的共感 (parallel empathy)、
他者指向の共感を応答的共感 (reactive empathy)
とし、他者指向の応答的共感に優れる者は、仲間
との関係の中で援助や協力など友好的行動をとる
ことが多く、そのような行動を仲間から受けるこ
とも多いとしている。このことから、他者指向の
応答的共感とは自己指向の平行的共感より発達の
水準が高いと位置づけられている。

このようないくつかのタイプが想定される共感
であるが、その役割として大きく3つ考えること
が出来る。一つ目は、感情的な結合、つまり、感
情的に意味ある経験が二人以上の個人によって共
有される、感情状態のコミュニケーション (Plu
thik、1987)である。原初的で、重要な意味を持
つ感情的な結合として、母子間の感情的結合が挙
げられる。Sullivan (1953)は、母親と乳児が相
互に共感関係で結びついているとし、母親の感情
状態が乳児によって感知されるのは、言語を媒介
としない感情的交流 (原初的共感過程) によると
した (Sullivan、1962)。また、母子のみならず、
親子間の社会的絆も重要である。親の共感反応に

より、子どもは自分が理解され、支持されているという感覚を受け取り、支持される経験が親への愛着を深め、親子の愛着関係を促すことになると考えられている。

二つ目の役割は、人格発達の影響についてのものである。共感することにより、他者の中に自己の一部でないものを知覚し、自己の経験を超えた他者の経験の中に参与することによって自己が拡大し、形成される。特に乳児は、母親の正負の感情を知覚し、正の感情からは「良い自分」、負の感情からは「悪い自分」「自分でない自分」を知覚し、自己像を形成するとされている（Sullivan、1962）。また、共感の高さが、社会的理解能力や思いやりの感情や行動、反社会的・攻撃的行動の抑制能力と関連していたり（Feshbach & Roe、1968）、道徳性の思いやり原理の活性化や、援助といった利他的な行動につながる事が示されている（Hoffman、1987）。しかし、これらについての実証的研究は少なく、さらなる研究が求められている部分でもある。

三つ目の役割として、共感の心理療法についてのものである。代表的な心理療法においてみると、まず、精神分析的心理療法では、他者の心的生活に近づく唯一の手段は直接のおよび代理的（共感的）内省であるとしている。Kohut（1981／1991）は、患者の考えなどを正確に理解するための情報収集としての共感と、解釈のレベルでの説明を与える、人々の間の強い感情的結びつきとしての共感の2種両方が必要だとしている。対象関係療法においては、共感とは、セラピストがポジティブな対人的な場を作り出すことを促進するものであり、また、洞察と解釈に役立つ一つの分析的道具として重要（Mahler et al、1975）とされている。来談者中心療法では、「共感的理解」として、セラピスト側の考えや価値を一時保留停止にして、相手の世界を生き、経験し、そこで感じ取ったものを相手にコミュニケーションすること（Rogers、1975）で、来談者が以前に受容できずに避けた経験を自分自身の一部として気づき、受容するようになるのを助ける役割を担っていると

し、いずれの心理療法においても共感を重要なものと捉えていることが伺える。

このように3つの役割を持つ共感の進化論的起源を考えると、人間の共感に似た行動が、進化論的に人間に近いほ乳類ないしは霊長類において数多く報告されていることに気づく。このことは共感が生物学的、進化論的基礎を持っていることを示している。

人間の生物学的基礎は、脳の構造と機能、大脳の神経学的過程にあると考えられる。例えば、前頭葉系では、Andreasen（1984）により「感情の座」と名付けられたとおり、感情・意志・決断・創造性の重要な調整が行われている。前頭葉の損傷患者には、強い無関心、突然の激怒などの情動不安定や、感情の関与の持続性の欠如といった症状、さらに、他者の反応や期待に対する感受性の感度の欠如や、他者の感情の理解不能と共感的反応の極度の少なさが見られる。また、右半球は、コミュニケーションの感情的側面が統制されており、感情の受け取りと表出に関係していると考えられている。現代の神経学的研究は、共感に含まれるいくつかの神経生理学的過程についての洞察を与えるが、共感に関する神経学的モデルといったものが確立することは見通しが立っていないというのが現状である。

4. 共感の測定法

共感をどのような形で取り上げ、どのように測定するのかということは共感研究において重要な課題である。共感をどのように定義するのか、研究対象をどのような年齢段階の者にするかにより様々な測定法が工夫されてきた。

まず、状態としての共感を測定するものとして、観察法（菊池、1998）や絵とストーリー呈示による方法、共感的感情語の評定による自己報告および他者報告、顔の表情などの身体的測定、生理学的測定がある。また、特性としての共感性の測定法としては、他者の感情経験に対する感情的応答性あるいは感情の共有経験についての種々の記述が質問項目として与えられる質問紙法が用いられ

てきた。

共感が人と人との感情的結びつきを促す機能を果たしていることを考えると、日常的な場面において共感という現象がどのような状況で、どのような形で生じるのか、共感することが相手にどのような影響をもたらし、さらにそれによって相互の関わり方がどのように変化するかを見ていくことが共感研究の重要な視点になるだろう。状態としての共感の測定法では、仮想的な状況が与えられるだけであり、実際に相互作用する現実の相手はいない。また、特性としての共感の測定法では、日常的な場面が質問紙での言語を通して与えられ、その場面についての回想に基づく反応を自己報告させているだけであって、実際の相互作用を測定しているわけではない。そのようなことから、状態や特性のいずれの共感を測定するにしても、日常生活場面の中や実際に生じる共感現象を捉えるためには、生態学的なアプローチが必要である。そのためには、身体測度や、生理学的測度と共に、自己報告を併用するなど、共感を測定する場合には、ひとつの測定法のみならず、いくつかの測定法を併用することが最善と考えられる。

5. 共感の生起メカニズムと発達

共感はどうにして生じるのか。共感の生起メカニズムには、乳幼児では単純な心理過程、成人では比較的複雑な心理過程が含まれていると考えられている。Hoffman (1978、1984) は、共感生起の様式として、第一次循環反応、古典的条件付け、動作模倣、直接連合、言語を媒介とした連合、役割通りの6つを挙げた。この6つの共感的反応タイプは、必ずしも発達的变化に対応したものではない。「伝線的泣き」に見られる第一次循環反応は、幼児期を過ぎればそれをコントロール出来るようになるため消えるが、これに似た反応として「もらい泣き」のように大人でもみられることがある。また、役割取りが十分に出来るようになるのは、認知能力が発達してからになるが、それ以外の4タイプの反応は、それ以前の段階で見られるようになり、生涯を通して続いていくも

のと考えられている。

共感の発達的变化は、自己指向的なものから他者指向的なものへと変わることであり、役割取りに見られるような認知的能力の変化に伴うものとして捉えられている。このことと共に、感情の成熟や言語の習得もこの変化を支える要因であろう。しかし、このような発達的变化の過程が全て実証的に裏付けられているかといえば、必ずしもそうではない。研究者によって、共感の概念そのものが異なり、研究の対象も年齢的に狭く、さらに、用いられている研究方法が種々様々であるため、共感が年齢と共に発達的に変化していくことに関する十分な資料があるとは言えない。共感についてさらにまとまった知見を得ようとするならば、研究者がある一定の定義や方法を共有する必要があるだろう。

共感発達を促す条件について考えるとき、最初に挙げられるのは、養育者との早期の愛着関係である。子どもは、養育者についての安定した愛着からもたらされる信頼と安定の感覚により、自分の要求だけを満足させようとする気持ちが少なくなり、他人の感情や要求に注意が向くようになると考えられている。安定した愛着が持たれるかどうかは、養育者の愛情と養育性が十分なものであるかどうかによる。子どもの要求を十分に満たしてやるという養育者の愛情が、共感の発達にとって重要になると考えられる。

次に、養育者の共感性が挙げられる。共感の発達には、モデリングや同一視が重要な働きをすると考えられているため、特に、母親が子どもの要求や苦痛に対してどのくらい関心を持つのかという母親の共感のあり方は、子どもの共感発達に関して大きな影響を及ぼすことが予測される。もちろん、母親のみならず父親もきょうだいも祖父母も友人も、子どもの共感のモデルという役割において重要な存在である。

さらに、親や周囲の大人の養育態度も子どもの共感発達に関わる重要な要因と考えられている。子どものしつけ方略として、「力中心」「愛情の除去」「誘導的」の3つがある。「力中心」では、物

やお金を与えることや罰を与えることがなされ、「愛情の除去」では、親が愛情を与えず、「誘導的」なしつけでは、自分のやったことが相手に与える効果に注目させることが中心となる。「誘導的」なしつけは、相手の情動の変化に注意を向けさせることと同時に、子どもに役割通りの経験をさせることになるため、「共感」を促進させるという点において有効なしつけの手法とされている。

他にも、子どもに他人と類似している点に注目させることや、過度に対人的な競争をさせないこと、また、肯定的な自己概念を持たせることなどが「共感」を育むしつけの手法とされている。

6. 共感と向社会的行動との関連

向社会的行動とは、相手に対する援助を含んだ行動である。この行動は相手のためになること、その行動をとることで外的報酬を得ることが目指されていないこと、さらに、その行動をとることで自分に損失が出るにもかかわらず自発的にされることが特色である。このような意味での向社会的行動の動機として、共感が問題とされることが多い。共感とは相手の行動を予測するだけでなく、相手と同じ情動を持つようになることを含んでいる。相手の悩みが分かるだけでなく、その悩みに伴う苦痛を共有することになれば、その相手に何かしてやろうとするのは自然なことである。

他者の苦しみを目撃したときの共感的苦しみは、部分的に他者への心配の感情に変形される。自己と他者との区別がつかない（自他融合の）段階では、他者の苦しみに対して自己を慰めることで応答する。これが、自己と他者の区別に気づく（自他が分化された）段階では、他者と自己の両方を慰める行為へと移行していく（Hoffman, 1984）。

Weiner (1985) は、人が行動や出来事の原因について推測する傾向について指摘したが、人は苦しみにある他者に会おうと、その原因について推論（帰属）を行い、その帰属次第で共感の経験のされ方が異なってくると考えられている。例えば、他者自身がその苦しみに対して責任があることを手がかりが示す場合には、人は冷淡さやある

いは軽蔑を経験し、他者の苦境の原因についての十分な手がかりがないときは原因帰属なしで反応し、共感的苦しみや援助したいという願望に沿った同情的苦しみが経験される。他者の苦境の原因が第三者にある場合には、他者よりも第三者に注意が移り、第三者への共感的怒りと同情的苦しみを経験されるが、他者の苦しみの原因が自分自身であると分かったとき、罪悪感を経験することとなる。Hoffman (1978, 1982) は、共感的苦しみや同情的苦しみ、罪悪感が道徳的行為に対する動機として機能するものとしている。共感的怒りは、まだ十分に研究されていないが、なんらかのやり方で犠牲者に介入し、保護する傾向を生み出すものであり、同情的苦しみよりも強く行為を導く感情と考えられている（澤田、1992）。

7. 「三項関係情動」

これまで「共感」に関する先行研究のレビューを行ってきたが、この章では、筆者が「共感」をどのように捉えるかについて述べたいと思う。

筆者は、他者に宝くじが当たる、または、他者が試験に失敗するなどといった、自分自身の利害に直接絡まない出来事について、自己に経験される情動に関心を持ち、研究を行ってきた。従来の情動研究を概観するとき、その研究対象はもっぱら、個体自らの利害関心に関係する事象においてのみ人に経験される「当事者」の情動がほとんどである。例えば、近年、情動研究において多くの支持を得ている理論として、基本的情動理論や認知評価の理論があるが、それらは結局のところ、自己が直接関連した出来事にのみ生じる情動、いわばその出来事に「当事者」として関わるときに経験される「当事者情動」を取り上げているものと言える。我々は自らに直接関係する事象だけではなく、自らとは関係のない事象、例えば、他者に起こった事象についても、なんらかの情動が経験されるということは日常において経験されることである。だが、自らに絡まない事象において、人が第三者として経験するような「非当事者」の情動についての研究はこれまでほとんど行われて

きていないというのが現状である。もちろん、必ずしも「今ここでの利害」に絡むものばかりではない、より複雑な情動も研究のターゲットになっていることは確かである。とりわけ、自己と他者との関係性や他者の目に映る自己の姿などについての複雑な意識が絡む、いわゆる自己意識的情動 (self-conscious emotion) などは、近年、多くの研究者が高い関心を寄せるところである。しかし、こうした自己意識的情動にしても、他者との関係の維持や向上などが、結局本人自らの利害に関係している点では同じであり、やはりそこで問題にされるのは、結局のところ「当事者情動」ということが出来るだろう。

このように、これまで多くの情動研究が行われてきてはいるが、その主たる対象は、個体自らの利害関心に直接絡む「当事者」の情動であった。換言するならば、これまでの情動研究は「事象 (e)」と「事象の直接経験者 (x)」との“二項”関係の性質によって、x の情動の生起の有無およびその種類や性質が規定されるという側面に主たる関心を払ってきたといえる。しかし、筆者が問題にしている「非当事者」が経験する情動とは、「事象 (e)」 「事象の直接経験者 (x)」そしてその「事象には直接関係しない第三者 (y)」という、いわば“三項”関係の中で生じるものである。すなわち e が x に降りかかったことによって生じる y の情動経験に焦点を当てようとするものである。そうした意味で、こうした非当事者に経験される情動をここでは「三項関係情動」と呼ぶことにする (図1 参照)。

「三項関係情動」には他者に生じた出来事が良い出来事か悪い出来事かという点と、他者が経験

する情動の正負と自己が経験する情動の正負が一致するかどうかという点から4タイプに大別できると考えられる。その代表的な情動について具体的に言えば、他者にネガティブな事象が生じた際にその周りに位置する個体が覚える代理的な苦痛の経験である、「共感 (empathy)」あるいは「共感的苦痛 (empathic distress)」。他者が何らかの辛い状況にある場合の「いい気味」といった、ある種の喜びにも似た快感情、すなわち「シャーデンフロイデ (schadenfreude)」。賞をもらう、昇進するなど、他者にポジティブな事象が生じた際に、それを見聞きた個人が覚える相対的にネガティブな情動、すなわち「妬み (envy)」。

そして、他者が良い状況にある場合に、その他者の幸せを自分自身のことのように他者と共に喜ぶ「共感的喜び (empathic joy)」とでもいうべき情動である。図2には、他者に起こったのが良い出来事か悪い出来事かという軸と、その時、それに接した個人が経験する情動が、他者が経験するであろう情動と同類の情動かまたは正反対の情動かという軸を直交的に組み合わせる形で、上述した4つの代表的な「三項関係情動」を配置してある。

これら4つの「三項関係情動」のうち、これまで最も多くの関心が寄せられ研究が進められてきたのは、「共感」あるいは「共感的苦痛」であり、また、ほとんど研究されてこなかったのは「共感的喜び」や「シャーデンフロイデ」である。これまでの情動研究を概観するとき、「三項関係情動」の中でも、「共感」あるいは「共感的苦痛」以外の情動についての研究は相対的に稀少であり (もっとも「妬み」については最近、嫉妬という情動との関連で部分的に取り上げられてきてはいるが)、

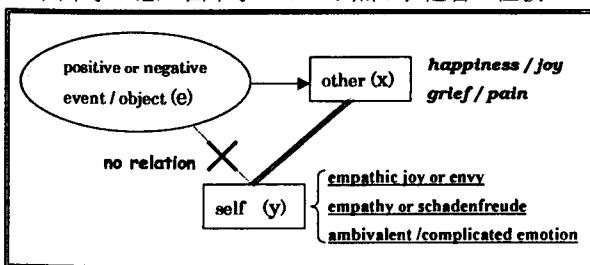


図1 三項関係情動

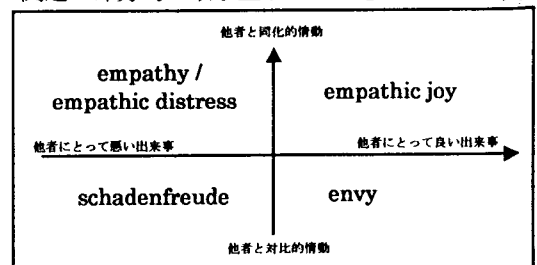


図2 4タイプの三項関係情動

特に「シャーデンフロイデ」や「共感的喜び」に相当する情動を実証的心理学研究の枠内に見出すことはほとんど出来ない。さらに、他者に正負いずれかの事象が生じたという同様の状況にありながら、ある時は「共感的苦痛」をある時は「シャーデンフロイデ」を、またある時は「共感的喜び」をある時は「妬み」を覚えることがあるわけであるが、それはどのような要因によって分岐するのか、全体的なメカニズムが既成の情動理論からはいっこうに見えてこないのが現状である。こうした情動に関して理論的枠付けを作ることが、今後の情動研究全般に新たな地平を拓き得るのではないかと筆者は考える。

8. 特性としての共感 情動としての共感

1～6章で概観してきたように、過去において、共感に関して多くの研究が行われてきたわけであるが、従来の研究は、どちらかという「情動としての共感」ではなく、「共感する能力」により大きな関心を払ってきたと言えるのではないだろうか。つまり、従来の研究は、誰にどんな場面で共感するかということより、広く色々な人に対して色々な場面で共感するという、その人の安定した特性を探ろうとしてきたと考えられるのである。共感する能力・特性についてなされてきた多くの研究は、共感のある一側面について多くのことを呈示してきたという点において高く評価できるものである。しかし、筆者は、能力・特性といったそれらの研究の方向性を評価しつつも、その時々により多様に経験される「情動としての共感」に着目することによって、従来、見えてこなかった共感の本質的特徴が見えてくる可能性があるのではないかと考える。私たちは、誰にとってどんな苦痛かということによって共感したり、しなかったりする存在であり、時にはシャーデンフロイデ（いい気味）を経験してしまう存在でもありうる。そのため、共感という情動を、「三項関係情動」のうちのひとつとして捉え、どの他者にいかなる事象が生じたのかということ、つまり、その場を構成する状況的な要因に、より焦点化したアプロー

チが必要であると考ええる。

このように共感を「三項関係情動」のうちのひとつの情動として見る場合、「共感」だけを取り上げるのではなく、他者に不幸な出来事が起こった際に経験され得るもう一つの情動である、「シャーデンフロイデ」と共に考察する必要性を考えたい。人は周囲の他者にネガティブな出来事が起こった際、どんなときでも他者と共に悲しむわけではない。時に、他者にネガティブな出来事が起こることは人にある種の喜びをもたらす場合もある。いつの場合でも、人は、他者の不幸に際して、他者と共に悲しむ共感と、反対に「いい気味」といった「シャーデンフロイデ」の両方が経験される可能性を持ちうるわけであり、「何か」によって、どちらか一方の情動だけが経験されたり、または両方の情動が経験されたり、さらには、両方の情動が経験されるが、いずれか一方の情動が他方より強く経験されるということになる。

レビューの中では、養育者のしつけ方略や共感性といった、人の発達過程における被養育経験の質が、個人の共感発達に大きく影響与えることが挙げられていた。養育者のしつけや共感性などによって人の特性としての共感（共感性）が形成され、さらに、個人の感情傾向やその他の特性、また感情傾向や特性を持った上での様々な個人的な経験の蓄積によって定着した個人内における要因というものは、当然、共感や「シャーデンフロイデ」をひき起こす重要な一つの要因となることが予想される。しかし、果たして、共感生起場面において情動を生起し分ける重要な要因となるのは個人内要因それだけであろうか。

筆者は、その情動が生起される場が形成する状況による影響にも着目し、「三項関係情動」の「三項」に表される「自己」「他者」「事象」の3つの関係から構成される状況が、共感や「シャーデンフロイデ」の発生に関わる重要な要因となりうると思う。例えば、共感性の高い、ある人物がいた場合、その人物は、ネガティブな事象が起こる他者が、全く知らない人である場合と、長年の親友である場合との両方で、同じように「共感」

を経験するだろうか。あるいは、ネガティブな事象が起こる他者がいずれも長年の親友であるとしても、その事象が起こる以前の親友の状態が、とても幸福な場合ととても不幸な場合の両方において、同程度の「共感」が経験されるだろうか。全く知らない人よりも親友に、もともと幸福な状態にあるよりも、もともと不幸である状態に悪い出来事が起こりさらに不幸になる場合の方が、より高い「共感」が経験されるのではないだろうか。

筆者は自己と他者との関係性や、出来事の性質そのものといった状況要因が、経験される情動を発生し分ける上で重要な関与を持つと考えている。上述のレビューの中で、他者に起こった事象の原因帰属をすることで、経験される共感の内容や情動そのものが異なることが挙げられていたが、まさしくネガティブな事象がどのような理由で生じたかという原因帰属なども、その場の状況を含む状況要因の一つとして考えられる。むしろ、「共感」と「シャーデンフロイデ」の発生要因を考えるとき、状況要因だけを明らかにしても十分ではない。個人の特性や被養育経験の質、感情傾向といった個人内の要因についてもその詳細を同様に明らかにし、さらには、状況要因と個人内要因が相互にどのように影響し合っているのかその交絡についても明らかにする必要もある。筆者は現在までに、「三項関係情動」のうち、他者にポジティブな出来事が生じた際に経験される「妬み」と「共感的喜び」の発生に関わる状況要因について調査を行った。結果、「妬み」と「共感的喜び」の発生には、他者との親密度や、他者に起こった出来事の自己にとっての意味、出来事の原因帰属や、他者に出来事が起こる以前の自己と他者との幸福状態のバランスなどが重要に関連することが明らかとなった。これらの結果をふまえて、筆者はまず、「共感」と「シャーデンフロイデ」の発生に関与する状況要因について明らかにしたいと考える。その後、得られた結果と、「妬み」と「共感的喜び」の場合で得られた結果との比較を行い、類似や差異を把握し、さらに、状況要因のみならず個人内要因の関与も明らかにすることに

よって、総体的に「三項関係情動」の生起メカニズムについてその全貌を明らかにすることを目指す。

文 献

- Allport, G. W. (1937). *Personality: A psychological interpretation*. New York: Henry Holt.
- Andreasen, N. C. (1984). *The broken brain*. Harper & Row. 岡崎祐士他訳『故障した脳』紀伊国屋書店、1986.
- Batson, C. D. & Coke, J. (1981). *Empathy: A source of altruistic motivation for helping*. In J. P. Rushton & R. M. Scorsone (Eds.), *Altruism and helping behavior: Social, personality, and developmental perspectives*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Buchheimer, A. (1963). The development of ideas about empathy. *Journal of Counseling Psychology*, 10, 61-70.
- Dollard, J. & Miller, N. (1950). *Personality and psychotherapy*. New York: McGraw-Hill.
- Feshbach, N. D. & Roe, K. (1968). Empathy in six and seven years olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- Freud, S. (1960). *Jokes and their relations to the unconscious*. London: Routledge & Kegan Paul (original work published 1905).
- Hobbes, Th. (1651). *Leviathan*. 永井道雄・宗片邦義訳『世界の名著』(28) 中央公論社、1979.
- Hoffman, M. L. (1978). Toward a theory of empathic arousal and development. In M. Lewis & L. A. Rosenblum (Eds.), *The development of affect*. Plenum Press.
- Hoffman, M. L. (1982). Development of prosocial motivation: empathy and guilty. In Eisenberg, N. (Ed.), *The Development of Prosocial Behavior*. Academic Press, 218-313.
- Hoffman, M. L. (1984). Interaction of affect and cognition in empathy. In C. E. Izard, J. Kagan & R. B. Zajonc (Eds.), *Emotions*,

- cognition, and behavior. Cambridge University Press.
- Hoffman, M. L. (1987). The contribution of empathy to justice and moral judgment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Hoffman, M. L. (1989). Empathy and prosocial activism. In Eisenberg, N., Reykowski, J. and Staub, E. (Eds.), *Social and Moral Values*. Lawrence Erlbaum, 65-85.
- Hume, D. (1978). *A treatise of human nature*. Oxford University Press. (original work published 1739).
- 菊池章夫. (1998). *また／思いやりを科学する*. 川島書店.
- Kohut, H. (1981/1991). On empathy (1981). In P. H. Omstein (Ed.), *The search for the self. selected writings of Heinz Kohut: 1978-1981*. New York: International University Press.
- Lipps, T. (1903). Einfühlung, inner Nachahmung, und Organempfindungen. *Archiv für die gesamte Psychologie*, 2, 185-204.
- Mahler, M., Pine, F. & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books.
- Mark H. Davis. (1994). *Empathy*. 菊池章夫訳『共感の社会心理学』川島書店、1999.
- Plutchik, R. (1987). Evolutionary bases of empathy. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic: An unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist*, 2, 2-10.
- 澤田 瑞也. (1992). *共感の心理学*. 世界思想社.
- Staub, E. (1987). Commentary on Part I. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W. W. Norton.
- Sullivan, H. S. (1962). *Schizophrenia as a human process*. New York: Norton & Norton.
- Titchener, E. (1909). *Experimental psychology of the thought processes*. New York: Macmillan.
- Weiner, B. (1985). "Spontaneous" causal thinking. *Psychological Bulletin*, 97, 74-84.
- Wind, E. (1963). *Art and anarchy*. London: Faber and Faber.

(博士後期課程)